

櫻井通晴先生のご退職にあたって

青 木 章 通
経営学部助教授

櫻井通晴先生が古希を迎えられ、定年により本学を去られることになりました。櫻井先生は1969年（偶然にも、私が生まれた年です）に助手として入職されて以来、38年間という非常に長い時間を専修大学で過ごされました。私は櫻井先生には、大学院時代から13年、そして同時に縁あって専修大学経営学部へ移ってからは2年間お世話になりました。退職記念号にこのような文章を書く機会を頂いたのは、私が専修大学という同じ職場で働いているためであろうと思います。しかし、私にとっては職場の同僚としての櫻井先生よりも、指導教授としての櫻井先生のイメージが強いのです。そこで、大学院時代の思い出を書くことで、送る言葉としたいと思います。

私が櫻井先生に初めてお会いしたのは、大学を卒業して1年半ほど経った頃でした。当時、私は税理士を目指して会計事務所に勤務していましたが、所長（公認会計士の社本公一先生）に許可を頂き、働きながら大学院で勉強することを許して頂いたのです。仕事で管理会計の重要性を感じていたので所長に相談したところ、「専修大学に櫻井先生という先生がおり、公認会計士業界でも大変注目されている」と勧めて頂きました。ちょうど、名著『企業環境の変化と管理会計』が実務界においても注目を集めていた時期でした。また、その言葉を裏付けるように、櫻井先生が公認会計士の2次試験委員に就任された年であったと記憶しています。

久しぶりの大学生活、私は少し甘かったのかもしれませんが。大学院合格後に初めて授業にお邪魔させて頂いたとき（たしか11月であったと記憶し

ています)に、出席者が全員スーツ着用であったことに驚かされました。先生には「大学院生は社会人と同じなのだから、スーツを着用するのが当然である」という考えがあったと聞いています。学生気分が抜けないまま私服で行った私は、少し恥ずかしい思いをしました。しかし、櫻井先生は服装については、最後まで一言も言いませんでした。ただ、大学院の風景を見せることで、「大学院とはどのような場所であるか自分で察しなさい」というメッセージを送ったのです。このように、櫻井先生は大学院生を常に1人の大人として扱っていたように思います。指導は厳しいものでしたが、最終的な決断はすべて学生自身に委ねられました。このような環境のもと、(私を除けば)人間的にもしっかりとした学生が多く社会・学界へ巣立っていったように思われます。

大学院の同期のゼミ生は故渡邊俊輔氏(元明治学院大学助教授)、松島桂樹氏(武蔵大学教授)でした。また、修士2年には山田義照氏(玉川大学助教授)が在籍していました。今から振り返ってみると、櫻井先生が後進の研究者の育成に力を入れていた時期に、私は幸運にも櫻井ゼミにもぐりこんだといえます。また、大学院の授業には他大学の教員、監査法人、企業(NEC、コマツなど)から様々な方が大学院の授業を聴講しており、非常に活気に満ちていました。外部の方々には櫻井先生の研究業績の一部でも学べればという思いで聴講しに来たのですが、櫻井先生は熱心な者に対しては学生であろうと、社会人であろうと分け隔てなく接しておりました。大学院の授業風景は私のイメージを大きく裏切り、大変まぶしく感じられたのを覚えています。

研究業績については、私が改めて書く必要もないでしょう。櫻井先生はこれまでに、翻訳を含めて著書68冊、論文約250本を執筆されました。とりわけ著書の多くは50代、60代の頃に集中しており、これだけの量の原稿をどうすれば執筆することができるのか、いまだに不思議でなりません。櫻井先生はいったい、いつ眠られているのだろうと皆で話し合ったことも

ありました。また、先生の研究テーマは常に、「この研究が日本企業に対して貢献するか」という視点から選択されてきたように思えます。たとえば、ABC（活動基準原価計算）は当事の構造的不況からの脱出、BSC（バランス・スコアカード）はビジョンや戦略に基づく経営の必要性、コーポレート・レピュテーションは内部統制や法令順守に対する意識改革などです。授業でもしばしば、日本のこれから、日本企業の現状を憂いていらっしやいました。

最後に、櫻井ゼミの恐ろしい習慣について書いておきます。櫻井ゼミの恒例行事として、毎年、忘年会や合宿で行われる「一言」があります。宴会で少しお酒も入ったところに、「それでは、みんな来年の抱負などを一言ずつお願いします」と櫻井先生が言うのです。数年前までは「抱負」であったが、この1-2年は「コミットメント」という言葉に置き換わりました。参加者に大学教員が多いので、私には恐怖の習慣でした。しかし、自分がなすべきことを明確に表明するので、良い動機付けにもなったし、自分の目標を整理する役にも立ちました。最後には、必ず櫻井先生もご自身の「一言」を述べておられました。もしかしたら、櫻井先生の仕事に対する情熱の一部は、このような環境のなかで醸成されてきたのかもしれない。

経営学部の会計スタッフは、ちょうど過渡期を迎えています。2年前に中山雅博先生が定年でお辞めになり、一昨年には竹林代嘉先生がお亡くなりになりました。櫻井先生がお辞めになると、一気に平均年齢が下がってしまいます。このような時期に専修大学をこよなく愛する櫻井先生のアドバイスを直接頂く機会が少なくなってしまうのは大変残念ですが、先生は4月以降も他大学で教鞭をとられると聞いています。ますます忙しくなる先生が心配することのないように、今後も頑張っていきます。

(2007年1月)